

ささいな恐怖

あなたの場合



GIMA

あなたの場合

あなたは小さな商事会社に勤めるOLだ。

三十半ばで独身、貧相な体型で、女性的魅力のかけらもない。仕事はできず、率直に言えば無能。「使えないババア」というのが、あなた以外の社員たちの一致した意見だ。

上司もすでにさじを投じている。叱責を受けたあなたは決してミスを認めず、ヒステリックにわめき散らすからだ。

——だが、そんなあなたも、最近にご機嫌だ。

数日前に、いつもあなたを叱責していた課長が死んだからだ。

正確に言うなら、帰宅途中に何者かに刃物でめった刺しにされて殺されたのだ。

やったー。いい気味。

あなたは思う。そして、思い出す。

以前にも同じようなことがあった。

新人のくせに、自分に当てつけるように恋人の話ばかりしていた女子社員。

彼女も、恋人と二人で自宅にいたところを刃物でめった刺しされ、殺されているのが発見された。

あなたは警察に事情聴取されたが、もちろんあなたにはアリバイがある。事件があった時刻、あなたは自分が住むアパートで、大声でわめき散らしながら、布団に包丁を突き刺していたのだ。これは隣人が証言している。

あれっ。おやっ。

あなたは思う。

ひょっとして、あたしが殺したのかな？

あのときの、あの包丁の手応えは、布団とは違っていたような気がする。

でもあたしは確かに自分の家にいたし。

ドレッサーをのぞくと、自分の顔が映る。

鏡に映った自分はニタリと笑い、鏡の向こうから包丁を突き出してきた、あなたはその包丁に喉を切り裂かれる。

翌日、包丁を握りしめて、ドレッサーの前で血まみれになって絶命しているあなたが発見される。

警察は現場の状況から自殺と判断し、捜査は終了する。